

# 迷答弁 街角に届ける

全国に広がる街頭での国会PV



PVで流した主な質疑

加藤勝信厚労相の「飯論法」が話題になった働き方改革  
 外国人労働者の受け入れを拡大した入管法改正  
 厚生労働省の毎月勤労統計など一連の統計不正  
 首相の公私混同が指摘される「桜を見る会」



国会審議の映像が流れるスクリーンに見入る  
 通行人ら17日午後5時27分、東京都新宿区



## 国会のやりとり 各地の路上で上映

意図的に論点をずらして答弁したり、回りくどい説明をした。そんな国会でのやりとりを知ってほしいという思いから、大学教授が始めたのが国会審議の「まちなか上映」だ。全国に広がる取り組みは名付けて、国会パブリックビューイング(PV)。

臨時国会が閉会して8日後の17日の夕刻、東京・新宿駅西口に共産党の田村哲子参議院議員の声が響いた。「安倍内閣のモラルハザードが問われているが、私は総理自身の問題を質問します」

地下広場の一角に置かれたのは、四つのスピーカーと高さ2層ほどのスクリーン。田村氏が質問する姿が字幕付きの映像で流れる。11月8日の参院予算委員会、臨時国会後半に連日続いた「桜を見る会」問題追及の発端となった質疑が続き、聴衆はまはら。9分経って安倍晋三首相が初めて答弁に立つと、「安倍さんじゃん」と立ち止まる夫婦が現れた。イヤホンを

したままスクリーンに見入る社員も。聴衆が最もわいたのは、桜を見る会を開催するため、今年度の3倍以上になった理由をたじたやりにとられた。大塚幸寛・内閣府官房長の「テロ対策の強化」という答弁に、田村氏が、事務所の秘書らが受け付けを済ませて手荷物検査をされなかったという首相の後援会の男性の証言をぶつけた。そして、「何が『テロ対策を強めた』ですか」と突っ込んだ。官僚の「迷答弁」ぶりがあらわになり、観客からどっと笑い声があがった。

約30分の質疑が終わるころには、聴衆は50人近くにふくれあがった。

### 仕掛け人「ご飯論法」命名者

仕掛け人は上西充子・法政大学教授。上映中、口を挟まず、様子を見守るだけのことも多い。「結論の押しつけはしない。情報を切り貼りしない」。テレビやネットで審議を見ることはできるが、多くの国民がその情報に触れているとは限らない。そんな状況のなかで、国会を「可視化」することが狙いだという。

専門は労働問題。昨年の働き方改革関連法案の質疑で、答えをはぐらかす加藤勝信厚生労働相に憤った。加藤氏の答弁を、「朝ご飯を食べなかったか」との質問に「(パンは食べたが)ご飯は食べていない」と答えるやりとりに例え、ツイッターに投稿。後にこうした答弁手法は「ご飯論法」と命名された。

政府の「不誠実な答弁」ぶりをどう知らせるのか。昨年6月11日にツイッターに「街頭上映会とかできないですかね」と書き込む

それぞれの得意分野を生かして審議の映像を作り、駅前で上映を始めた。投稿からわずか4日後だった。取り上げるテーマによって「見せ方」にも工夫を凝らす。働き方改革の際には、野党議員や加藤氏らが質疑応答する約3分の場面を十数個選び出し、答弁の不誠実さを上西さんが解説する動画を制作。費用はクラウドファンディングで集めた30万円でまかされた。一方、桜を見る会の問題

は「質疑を見れば問題が伝わる」と考え、首相が答弁に詰まり審議が中断する場面も含め、そのまま流す。街頭での上映回数は12月17日までに39回。上西さんが立ち上げた市民団体「国会パブリックビューイング」のメンバーの人脈を使つて北海道や名古屋、大阪などでも開催。活動の輪は広がっている。京都府の屋内試写会に参加した放送作家の血倉のぼるさん(57)は活動に共鳴し、国会パブ

(永田大)